

## Oscar Wilde における「芸術」のありかた

—The Picture of Dorian Gray の  
“Sibyl Vane” エピソードを中心に—

浦部 尚志

(青山学院大学大学院博士後期課程)

*The Decay of Lying* 等に見られる Oscar Wilde の芸術理念の特徴は、(1)人工的な imaginative art の尊重、(2) realism への敵対、(3)現実の人生が芸術を模倣すること (Life imitates Art) の三点に要約されよう。

彼のこの考え方は、何よりも *The Picture of Dorian Gray* の中で、主人公 Dorian が、Sibyl Vane という名の女優に恋をするエピソードにおいて確認できる。——場末の劇場で、Shakespeare 劇を演じる Sibyl の才能を Dorian は認め、賛美する。「芸術」の世界こそ「現実」となっていた Dorian の心が、彼女に引かれていくのは当然だった。そのため、Dorian は、彼女と婚約までしてしまう。だが、Sibyl は「芸術」を捨て、「美しい現実」(すなわち Dorian) を追う平凡な少女に成り下がり、ひどい演技しかできなくなってしまう。問い詰める Dorian に、Sibyl は熱烈な愛の告白で返答する。だが、女優としての Sibyl のみを愛している Dorian には「現実の恋」など関係ない。「至高の芸術」を生み出せなくなった女優に、もはや用はなかった。だから彼は、冷酷な態度で Sibyl を捨てる。そして彼女は、無残な形で自殺に追い込まれる。

以上のエピソードに Wilde が標榜する「芸術」の理想が窺える。まず、才能ある女優の演技によって創造される、精緻な「架空の感情」の中に、Wilde は自らが目指す「芸術」の理想を見出している。次に、当時英国文壇の主流であった realism への嫌悪の情も見て取れる。Dorian に会う前の Sibyl にとって、現実世界は「醜」のみが存在している場所であった。それでも、架空の世界である舞台上では芸術的な美を作り出すことができた。なのに彼女は、「現実」に価値を見出す、つまらない少女に成り下がってしまった。だから、彼女は抹殺されることになったのである。また、Lord Henry の口を通じて、Sibyl の死は彼女が演じていた Shakespeare 悲劇の模倣となっているのだということも明かされる。ここで彼女は “Life imitates art” の理論にも乗せられていたことが分かるのである。

Wilde のこういった手法は “Symbolism” にも直結する。目に見える現実に意義を見

出すのではなく、その内奥に潜む神秘を探ろうとする試みこそが Symbolism の基本だからである。だが、この小説の1891年版で、写実主義的な要素が増加したという、Wilde の「過ち」を指摘する批評家も存在する。この点に関して、Donald L. Lawler は、それは、この作品の序文で表明された「道徳的な作品とか、不道徳な作品とかいうものはない。作品はうまく書かれているか、否かだ」という理論を Wilde が確実ならしめようとした結果なのだ、と解釈した。

だが、そうではなく、これも多分に「象徴主義」的意図があったからではないかと考えられる。Sibyl の舞台上のエピソードにおいても、以前から醜悪な realism が十分に存在していたことを見れば明らかだからである。

Sibyl と同じ舞台に立っていた役者たちの醜い写実的描写と、かつては唯美主義の代表者であった美しい Sibyl は、初めから十分なコントラストを作っていたのだから。そして、彼女は、この俳優たちだけでなく、醜い舞台装置や生活環境の中にも、想像力を駆使して、「美」を見出さねばならないという使命があったのに、それができなくなったから抹殺されたとも言えるのである。写実的・自然主義的なものをわざと作品の中に配置するという、この手法は、Symbolism 中の「自然主義的置き換え」(Naturalistic Permutation) と呼ばれるものである。それは意図的に「realism 的」な傾向を持つ事物を作成して、そこから神秘的な様相を現出させるという、一種撞着するような不可思議な方法である。Wilde が、一見自分の意図に反するかのような改変をした訳は、この手法によって、作品にもっとミステリアスな雰囲気を与えようという意図があったためではないかと思われる。

\* \* \*

Wilde が劇作家として成功する前に書いた最後の大作は、この *The Picture of Dorian Gray* であった。この後、彼は *Salome* を経て、“Comedy of Manners” の伝統の復活に寄与する、四大喜劇を完成させる。しかし、彼がそれらの悲・喜劇を作り上げるために用いた理論は、本稿において考察してきたものと決して異っていなかった筈である。

「imaginative Art の尊重」と「realism への敵対」という精神は、英文学における象徴主義文学の金字塔である *Salome* において生かされているし、現実の人生が「芸術」を模倣するという考え方は、*The Importance of Being Earnest* の筋仕立てに最もよく窺える。

Wilde は大衆的な作家に過ぎないのだという声を耳にする。また、様々な矛盾にぶつかり、我々研究者が思い悩むことも現状である。だが実は、彼ほど常に自分の理論に忠実であろうとした作家はいないのである。